

二〇二五年度 聖ドミニコ学園中学校入学試験（第1回）

# 国語

## 50分

◎次の注意事項<sup>じこう</sup>を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題は全部で11ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点や「」など記号もすべて一字に数えます。



【一】 次の〜〜線の漢字は読み方をひらがなで答え、――線のカタカナは漢字に直しなさい。

- ① 丸みを帯びたネコの置き物を作る。
- ② 故意に傷つけたわけではない。
- ③ 試合で強敵を打破する。
- ④ 勇気を奮つて戦う。
- ⑤ 取捨選択を重ねる。
- ⑥ 真相をキュウメイする。
- ⑦ 初優勝というカイキヨを達成する。
- ⑧ シゼン保護団体で活動する。
- ⑨ 文章の一部をショウリヤクする。
- ⑩ 小麦粉の重さをケイリヨウする。
- ⑪ 太陽系はギンガ系の一部だ。
- ⑫ ここにはキョカが無いと入れない。
- ⑬ 会社のケイエイ者に会う。
- ⑭ 物語のドウニユウ部分を書く。
- ⑮ この先は立ち入りキンシだ。
- ⑯ 子どものケンリ条約を読む。
- ⑰ ダンカイを追って説明する。
- ⑱ 平和センゲンを発信する。
- ⑲ 暖かいフクソウに着替える。
- ⑳ 部屋のスンポウを測る。

【二】次の「神父」と「学生」の対話を読んで、後の問いに答えなさい。

**神父** そう、わたしたちはつい人と自分を比較して、「あの人はあんなにできるのに、わたしは何もできない」と考えてしまいがちですが、そんなことはありません。単に、あの人とわたしでは、できることが違うだけ、神から与えられた使命が違うだけなのです。どちらの使命もそれぞれにすばらしく、使命のあいだに優劣など存在しません。

**学生** なるほど、そういわれるとぼくにも何かできることがあのような気がしてきました。文系の割にはプログラミングが得意だし、英語もある程度まで話せます。ただ、実際に何もできない人もいますよね。**A**、病気で寝たきりとか。そういう人はどうするんですか。

**神父** 病気で寝たきりの人は、本当に何もできないのでしょうか。先輩の神父からこんな話を聞いたことがあります。若い頃、発展途上国で貧しい人たちのために働いていたことがある神父です。その国に行くことが決まったとき、彼は、以前からよくお見舞いに行っていた高齢者にお別れをいいに行きました。**①** その人を残していくことへの、**②** うしろめたさもあつたそうです。

**B**、その高齢者は彼の話を聞いたあと、こういいました。「それはよかったです。きみは健康のほうでますます頑張ってください。ぼくは病気のほうで頑張るから」。「病気のほうで頑張る」とは、「どんなに病気が悪くなっても、最後まで希望を捨てずに生き続ける。あなたのために、病床からいつも祈っている」ということです。その

言葉を聞いたとき、彼は、「わたしが同じ立場だったら、こんなことがいえるだろうか。**③** このおじいさんのほうが、わたしよりすごいことをしているのではないか」と思ったそうです。

**学生** 病気で寝たきりの人にも、その人にしかできない使命があるということですね。確かに、癌や難病を患った人がブログなどで公開した闘病日記が、同じような境遇にあるたくさんの人たちを励ましたという話をときどき聞きます。

**神父** そう。病気だから何もできないのではなく、**C**、病気だからこそできることもあるのです。**④** マザー・テレサ(注)の体験談の中にも、印象的なものがあります。マザーが、初めてインド以外の国で施設を作ったときの話です。

ある日マザーは、いつも協力してくれる夫婦にお礼をいいに行くとにしました。その夫婦の家に着くと、ちょうど、子どもたちが食事をしているところでした。その様子を見てマザーは驚きました。子どもたちの一人に、とても重い障害があつたのです。気の毒に思ったマザーは、「この子を家で育てるのは大変でしょう。わたしたちが施設で引き取りましょうか」とお母さんにいいました。

**D**、お母さんは「なんてことをいうんですか。この子はわたしたちの宝物。わたしたちに愛を教えてくれる、『愛の博士』なのです」と答えたそうです。「この子のおかげで、わたしたちは見返りを求めずに愛する喜びを知った。この子は、わたしたちに愛のすばらしさを教えてくれる『愛の博士』だ」ということでした。その子に与えられた役割は、**X**「だったのです」。

愛される人がいなければ、愛することもできませんし、重い障害のため相手にお返しができないその子でなければ、見返りを求め

ない愛、無償<sup>むしょう</sup>の愛のすばらしさを教えることもできなかったでしょう。その子にも、その子にしかできない尊い使命があったのです。

学生 なるほど。そんなふうにと考えると、この世の中に何もできない人などいない。すべての人に尊い使命があるというのは、もしかすると本当かもしれないと思えますね。

神父 神がお造りになった以上、すべての命には必ず意味がある。わたしは、そう信じています。もし「自分の命には意味がない」という人がいたなら、それは単に、「**Y**」ということに過ぎません。どんな命にも、必ず与えられた使命があり、生きる意味があるのです。あなたの人生にも、もちろん意味があります。

学生 そういつてもらえると、ちよつと安心します。ただそれでも、競争というのはある程度まで必要じゃないかという気持ちはまだありますね。人と比較<sup>ひかく</sup>し、競争するからこそ、人間は成長するのではないかと。

神父 そういう部分は、確かにあるでしょう。「わたしも、あの人に負けないくらい、頑張<sup>がんば</sup>って自分に与えられた使命を果たそう」と思う。自分が自分らしく生きることを励ま<sup>はげ</sup>してくれるそのような競争心は、とても**⑤健全**だと思います。よくないのは、相手との競争に勝つことで自分が相手より優<sup>すぐ</sup>れていると思ひ込んだり、負けることで自分は相手より劣<sup>おと</sup>つていると思ひ込んだりすることなのです。それぞれに、それぞれのよさがある。そのことを、忘れてはいけないと思います。

(片柳弘史『何を信じて生きるのか』)

(注) マザー・テレサ……インドのコルカタで貧しい人々や病気に苦しむ人々を救う活動をした修道女。

問一 **A** **D** に入る言葉として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

<b>A</b>	ア たとえば	イ なぜなら	ウ したがって
<b>B</b>	ア だから	イ ところが	ウ あるいは
<b>C</b>	ア けれども	イ もしも	ウ むしろ
<b>D</b>	ア すると	イ ただし	ウ ところで

問二 線①「その人」について、本文中の言葉を使って15字以内で説明しなさい。

問三 線②「うしろめたさ」・⑤「健全」の意味として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

②「うしろめたさ」

- ア 相手にきらわれることへの深い悲しみ。
- イ 相手との約束を破ることへの罪の意識。
- ウ 何となく落ち着かず、腹立たしい思い。
- エ 何となく申し訳なく、心苦しい気持ち。

⑤「健全」

- ア 心も体も健康で、全体の中で特に目立つ存在であること。
- イ 若者が心と体を健<sup>すく</sup>やかに保つために欠かせない全能の力。
- ウ 考え方や行動にかたよりがなく、調和がとれている状態。
- エ 考え方や行動にかたよりがあり、日常的に不安定な状態。

問四

——線③「このおじいさんのほうが、わたしよりすごいことをしているのではないか」とありますが、その理由として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 相手の立場を重んじて、おだやかな言い方で非難しているから。
- イ つらい立場にあっても、相手の幸せや健康を望んでいるから。
- ウ 病気を受け入れて、明るく前向きに生きようとしているから。
- エ 苦しい状況じょうきょうにも関わらず、心にゆとりがあつて温かいから。

問五

——線④「マザー・テレサ」とありますが、本文に登場する「神父」と「学生」は、「マザー・テレサ」のある言葉をふまえて対話しています。その言葉として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 感謝の気持ちを表すときに忘れてはならないのは、最高の感謝とは、それを言葉にすることではなく、その気持ちを胸に生きていくことなのです。
- イ 昨日は去りました。明日はまだ来ていません。わたしたちにはただ、今日があるのみ。さあ、始めましょう。
- ウ ほとんどの人はチャンスのを逃してしまいます。チャンスは作業服を着ており、大変そうに見えるからです。
- エ わたしにできないことが、あなたにはできます。あなたにできないことが、わたしにはできます。一緒にいっしょになれば、きっとすばらしいことができるでしょう。

問六

X・Yに入る言葉として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア X 愛すること      イ 愛されること
- ウ 博士になること      エ 宝物について教えること
- Y      与えられた自分の命に責任は持てない
- イ 自分の命の意味に限界を感じてしまう
- ウ 自分の命の意味にまだ気づいていない
- エ 自分の命の意味を深く考え過ぎている

問七

本文の内容の説明として適当なものを次から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 学生は疑問が解消するまで何度でも神父に質問し、神父は具体例を交えながら丁寧ていねいに回答している。
- イ 神父は人から聞いた話を使いつつ自分の考えを説明しているが、学生は神父の考えに対して常に反論を試みている。
- ウ 神父は、世の中には何もできない人がいる、と認めている。
- エ マザー・テレサですら、生きる意味を見失いそうになった。
- オ 重い障害を持つ子どもは、全ての人々に喜びをもたらした。
- カ どんな命にも与えられた使命あたがあり、生きる意味がある。
- キ 人はそれぞれすばらしいが、使命あたを与えられるのは一部だ。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

トイレに駆け込み、思いつき息を吐き出す。置かれた芳香剤が周囲に甘ったるい香りを撒き散らしていた。鏡は水垢のせいで曇っていて、それがまだどうにも息苦しい。目を閉じると先ほどの唯奈の瞳が瞼の裏に浮かぶ。一年生の頃、きつと私は彼女と同じ目を持っていた。まだ何の挑戦もしておらず、無邪気に自分の才能を信じている目を。

高校一年生のNコン(注)の本番で、私は緊張のあまり意識が飛んだ。ファイルに挟んだ原稿用紙は何度も見返していたはずなのに、その時には視界が真っ白になって一文字も見えやしなかった。手が震えて、吐き気がした。今すぐこの場から逃げ出したかった。震える指先に力を込める。真っ白な紙が手の中でくしゃりと音を立てた。声を出さなければ、そう思った。なのに、私は何もできなかった。気が付いたときには本番は終わっていて、顧問は労るように私の肩を優しく叩いた。そこに示された同情に、私は他者の目に己がひどく惨めに映っていることを悟った。

その後、有紗は完璧な発表を行った。決勝に進出し、そのまま全国大会行きを決めた。彼女は一位だった。県大会で一位。その輝かしい結果に、私は「おめでとう」と彼女に告げた。①それは間違

いなく本心だった。だけど同時に、本心とは程遠い感情でもあった。私はそれまで、有紗より自分が劣っていると感じたことはなかった。もちろん、有紗が上手いことは分かっていた。だけど私だって彼女と肩を並べるくらいには上手い。そう心から信じていた。私は彼女をライバルだと認識していたし、彼女には負けたくないと思っ

ていた。でも、現実はそうではなかった。なんのことはない、私と有紗は初めから対等ではなかったのだ。

あの本番以降、私が朗読の舞台に立つことはなかった。人前に出るのが恐ろしかった。有紗と比べられて、私の方が劣っているという現実を突きつけられるのが怖かったのだ。

会話を交わしたことをきっかけに、唯奈は私の後を追いかけてくるようになった。どうやら随分懐かれたらしい。この日の練習でも、唯奈は私の顔を見るなりバタバタと駆け寄ってきた。まるで小型犬みたいだ。彼女の指先が私のブレザーの裾をしっかりと掴んでいる。「知咲先輩、あの、相談があるんですけど」

「さつすが。知咲ってば、もう森ちゃんの心をゲットしたのね」

有紗がケラケラと笑い声を上げる。X 身の置き場がないと感じたのか、唯奈は私の背に隠れた。

「もう、後輩をからかわないであげてよ」

「別にからかってないもん」

「はいはい」

私は後輩思いの優しい先輩の皮を被ると、唯奈の指を自分のブレザーから引き剥がした。その冷えた手を握り、私は彼女に微笑み掛ける。

「ここじゃアレだし、ファミレスでも行く?」

こちらの問いに、唯奈は素直に頷いた。

私たちの通う高校のすぐそばには、チェーン店のファミレスがあった。ドリンクバーを頼めばいつまでも居座れるので、居場所のな

い学生たちの溜まり場と化している。

私たちは入店するなり、一番奥にある席に座った。最も人目につかない場所だ。

「で、相談って？」

「原稿のことで悩んでるんです。どうしようかなって」

そう言っ、彼女はトートバッグからピンク色のクリアファイルを取り出した。

「原稿を作るの、初めてで」

「唯奈ちゃん、結局アナウンス部門に出ることにしたんだ？」

「はい。知咲先輩が、私の声がアナウンス向きだって言ってくれたんで。私、知咲先輩にそう言ってもらえてすごく嬉しくて」

私の名前を、彼女は大切そうに何度も紡いだ。宝物だと言ってガラスを抱きしめる、幼い子供みたいに。②なぜだか心臓の裏がざわついて、私は意味もなくグラスについた水滴を指の腹で押し潰した。

「それで、その原稿っていうのは？」

唯奈がAと原稿用紙を差し出してくる。四百個のマス目は丸っこい文字でびつりと埋め尽くされていた。書いては消してを何度も繰り返しているのだろう、紙面のところどころに鉛色の汚れが付着している。私はおしぼりで一度手を拭くと、汚さないように細心の注意を払いながらそれを受け取った。

「すごいね、全部自分で書いたんだ。唯奈ちゃんって中学から放送部？」

「い、いえ。③高校になって、初めて入りました」

「へえ。なんで入ろうと思ったの？」  
私の問いに、唯奈はぐくりと唾を呑んだ。無防備に晒された喉が微

かに震える。彼女は一度大きく息を吸い込むと、勢いに任せて言葉を吐いた。

「伝えたいことを伝えるのが、へたくそだからです」

そうなの？と、私は小さく首を傾げる。唯奈は顔を赤らめたまま、そうです、と頷いた。

「私、昔から自分の気持ちを伝えるのが、その、苦手で。だから、そんな自分を変えたいと思ったんです。人前で話す練習をすれば、私も変われるんじゃないかって、そう思っ」

「変われそう？」

「わかんないです。でも、私、こうやって誰かに伝えるために自分で文章を書いたり直したりするのって初めてで。なんか、頑張りたいなって、そう思ってます」

唯奈の指が、落ち着きなく自身の前髪に触れた。透明なレンズ越しに、彼女の長い睫毛が上下するのが見える。唯奈はグラスに入った水を一気に飲み干すと、それから言った。

「先輩はNコン、どうするんですか？」

その問いに、私は一瞬言葉を詰まらせた。紙ナプキンを一枚手に取ると、Bと丸める。手の中にある乾いた紙の塊を、私はそのまま押し潰した。

「出るつもりはないんだ」

「なんでです？」

「うーん、なんとなくかな」

曖昧な微笑。曖昧な返事。私が他者に見せる感情はいつだって、水で薄めた絵の具みたいに芯がなくてぼんやりしている。他人に④本音を見せるのが恐ろしくて、だからこんな風にめいっばい希



積しやくした言葉しか私は相手に伝えられない。

⑤一瞬いつしゆんだけ、唯奈の表情に影が過ぎった。彼女は自分を励はげますように、ぎゅつと拳を握りしめた。

「でも、私、先輩せんぱいと一緒にNコン出てくれたら嬉しいです。私、放送部で他に仲いい人もいないし。だから先輩だけが頼りなんです」

「そう言ってもらえると、なんか照れるね」

先輩だけ。その言葉に、私は無意識のうちに頬が緩むのを感じた。

良い先輩を演じられていることを素直に喜ぶ自分がいる一方で、脳の奥にいるもう一人の私がそんな自身を嘲笑する。

——本当は、自分だけを頼ってくれるなら誰でもいいんだ。他人から求められることで、自尊心を満たしてただけなんだよ。

膨れ上がった自意識が、私の首に手を掛ける。これがお前の本音だろうと、切り捨てたはずの感情を私の眼前に突き付ける。

それを見ないフリをして、私は目の前の先輩に話し掛けた。

「でも、せっかくだし他の部員とも喋ってみなよ。みんな唯奈ちゃんやんと仲良くなりたがつてるよ」

彼女は狼狽うろたえたように視線を右へ左へと彷徨さまよわせていたが、やがて観念したのか、こくりと首を縦に振った。

「先輩が言うなら、頑張ってみます」

⑥チクリと胸に走った痛みは、きつと私の気のせいだった。

帰り道。夕日は既に沈もうとしていた。藍色の空の裾を橙色の光が惨めみじったらしく纏つかんでいる。原稿の端を握ったまま、唯奈は添削された部分を嬉しうれそうに何度も指でなぞっていた。赤いボールペンで偉えらそうに書き込まれた文字は、すべて私のものだった。これまで

の部内練習で先輩から口を酸すっぱくして言われてきたことを、そのまま私も唯奈へ伝えた。アナウンス部門では原稿の出来も重要だ。

「抑揚のつけ方や言い回し」をいくつも試し、一文字一文字を推敲すいこうしていく。単語の横に引かれた青い波線はアクセント注意のマークだった。

「先輩、今日はありがとうございました」

唯奈がはにかみながら、しかしはつきりとした声で私に告げる。彼女の声音は耳に入った途端、溶けるように私の意識へと馴染なじんていった。

「ふふ、大したことしてないよ」

「そんなことないです。私、先輩には本当に感謝してるんです。先輩に会えたから、放送部に入って良かったなって、本気で思ってるんですから」

熱っぽく語る唯奈に、私は思わず吹き出してしまう。大袈裟おおげさすぎない？ と尋ねるが、彼女は真面目な顔でその言葉を否定した。

「私、Yい意気地いなしかから。誰かから優しくされるのを待っちゃうんです。他の一年生の子たちは中学の頃からの友達だったみたいで、なんかうまく溶け込こめなくて。だからスタジオとかでは一人で練習してたんです。録音練習なら、友達がいなくても自分でチェックできるから」

「あー、だからいつも声録こって練習してたんだ？」

「はい。けど、最近は先輩がいるから、毎日練習に行くのが楽しいです」

ストレートな感情をぶつけられ、一瞬息が詰づまった。唯奈の背筋がぴんと真っ直ぐに伸びていて、その目は前だけを向いていた。

新品同様の彼女のローファーが、力強くアスファルトを蹴る。唇から覗く白い歯がなんだか眩しくて、私は思わず目を伏せた。

「あ、」

横断歩道に差し掛かったとき、唯奈が慌てたように声を発した。

歩行者用の信号機が、青い光を点滅させている。思わず足を止めた私とは対照的に、唯奈はぱっと駆け出した。引かれた白線を軽やかに踏み、彼女はそのまま向こう側へと渡り終えた。

振り向いた彼女が、無邪気に私へ問いかける。長い髪がさらりと翻るのが、まるでスローモーションのように見えた。

「先輩、こっち来ないんですか」

信号が赤に変わる。車は来ない。しんと静まり返った道路を挟み、私と唯奈は見つめ合った。鞆がやけに重い。吹き抜ける風は生ぬるく、私をひどく不快にさせた。

「うん、まだ」

⑦ 私は、足を踏み出せなかった。

(武田綾乃『青い春を数えて』所収「白線と一步」)

(注) Nコン……NHK杯全国高校放送コンテストの略。アナウンスや朗読などの各部門について活動の成果を発表する大会。

問一

A

・

B

に入る言葉として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ずけずけ    イ ばらばら    ウ おずおず  
エ さらに    オ くしゃくしゃ

問二

——線X「身の置き場がない」・——線Y「意気地なし」の言葉の意味として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

X「身の置き場がない」

- ア 身体の一部に違和感がある    イ 居心地が悪く気まずい  
ウ 立っていられる空間がない    エ 相手の話し方が怖い

Y「意気地なし」

- ア 自分から動く勇気がない人    イ やる気がない人  
ウ 気持ちに通じ合わない人    エ 友達がいらない人

問三

——線①「それは間違いなく本心だった。だけど同時に、本心とは程遠い感情でもあった」とありますが、このときの知咲の気持ちの説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 有紗の輝かしい結果を祝う気持ちであるのと同時に、自分が有紗に負けたことを認めたくない。

イ 有紗の輝かしい結果をうらやむ気持ちであるのと同時に、自分に同じことができるか疑問に思っている。

ウ 有紗の輝かしい結果を疑っている気持ちであるのと同時に、自分が人前に出るのを恐れている。

エ 有紗の輝かしい結果を嬉しく思う気持ちであるのと同時に、コンテストの結果を疑っている。

問四

——線②「なぜだか心臓の裏がざわついて」とありますが、このときの知咲の気持ちの説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分に対してまっすぐな好意を向けてくる唯奈に対して、気恥ずかしく思っている。

イ 自分が素人の立場で口にした率直な感想を受けて嬉しそうな唯奈を見て、照れくささを感じている。

ウ 自分の意見が採用されて、唯奈がアナウンス部門出場を決めたことを嬉しく思っている。

エ 自分が優しい先輩のふりをして口にした言葉で嬉しそうにしている唯奈の姿を見て、決まりの悪さを感じている。

問五

——線③「高校になって、初めて入りました」とありますが、唯奈が放送部に入った理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 中学でも放送部だったから。

イ 知咲が放送部に所属していたから。

ウ 思いを伝えることが苦手な自分を変えたいと思ったから。

エ 知咲と一緒にコンテストに出場したかったから。

問六

——線④「本音」とありますが、ここでの知咲の本音とは何ですか。その説明をした次の一文の[ ]に当てはまる内容を、本文中の言葉を使って10字以内で答えなさい。

人前に出ることでは有紗と比べられ、[ ]という現実を突きつけられるのは恐ろしいからコンテストに出たくないという本音。

問七

——線⑤「一瞬だけ、唯奈の表情に影が過ぎった」とありますが、このときの唯奈の気持ちの説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 信頼する先輩を頼れないかもしれないと思って、不安に思っている。

イ 先輩を説得するのは無理かもしれないと思い、あきらめている。

ウ 先輩と一緒にコンテストに出場できることを嬉しく思っている。

エ 頼りにしていた先輩が頼りなく感じられて、心の中では失望している。

問八

——線⑥「チクリと胸に走った痛み」とありますが、痛みが走った理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今まで唯奈の前では良い先輩を演じていたが、他の部員と交流すること、自分の演技を見破られるかもしれないと思ったから。

イ 自分だけを頼りにしていた唯奈が、他の部員を頼れるようになる、自分との特別な関係が壊れるかもしれないと思ったから。

ウ 自分しか話せる人がいない唯奈を、無理に他の部員と関わらせようとしたことで、唯奈に嫌われてしまうかもしれないと思ったから。

エ コンクール出場について厳しい指導をしたせいで、これまでは良好だった唯奈との仲が悪くなってしまうかもしれないと思ったから。

問九

——線⑦「私は、足を踏み出せなかった」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「私は、足を踏み出せなかった」とありますが、これは知咲の現在の状況を暗示しています。知咲が「踏み出せな」いである状況の説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高校一年のNコンで緊張のため失敗したことで自信を失くし、有紗と同じ舞台に立つことができないでいる。

イ 高校一年のNコンで自分の書いた原稿が通用しなかったため、Nコンに再び挑戦することができないでいる。

ウ 有紗でもだめだった全国大会で自分が戦うことができると思えず、挑戦をためらっている。

エ Nコンにふさわしい作品を見つけたことができておらず、出場の申し込みができないでいる。

(2) 一步を踏み出せないでいる人がいたら、あなたはどのように声をかけてあげたいですか。自分の経験をあげながら100字以内で書きなさい。

[illegible]

100